

(公表用)

「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」(平成29年度採択)

事後評価結果

番号	研究名	研究代表者	評価
29-9	リモートセンシング技術を活用した道路土構造物の維持管理の効率化に関する研究開発	東京大学 教授 古関 潤一	A
<p>&lt;研究の概要&gt; ※成果報告レポートより引用</p> <p>リモートセンシング技術(合成開口レーダー[SAR])を活用し、広域の道路土構造物(のり面、地すべり、大規模切土、盛土など)の変状の経時変化を求め、道路点検や防災対策予算の優先度の評価、もらい災害の事前予知など、道路の維持管理の効率化および地質リスクの低減を図る技術を研究開発する。</p> <p>&lt;事後評価結果&gt;</p> <p>道路土構造物への適用という条件での適用限界が明確にされており、合成開口レーダーの実務適用につながる成果が得られている。また、マニュアル案の作成により、手法の具体的な適用が可能となり、その改善や他技術との併用による精度向上も期待できる。このことから、研究目的は達成され、十分な研究成果があったと評価する。</p> <p>&lt;参考意見&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 本技術の活用は、道路土構造物の維持管理や予防保全対策において有用と評価できる。今後さらなる解析・分析精度の向上が望まれる。</li><li>2. 適用限界は示されているが、使用事例なども踏まえた利用限界が整理されると使用促進に寄与すると考える。</li><li>3. 路線単位でのモデル試行を追加実施し、変状が発生する場所の事前把握手法としての合理性を訴求していくとよい。</li></ol>			

※本事後評価は、新道路技術会議の各委員が評価を行い、第43回新道路技術会議において審議したものである。